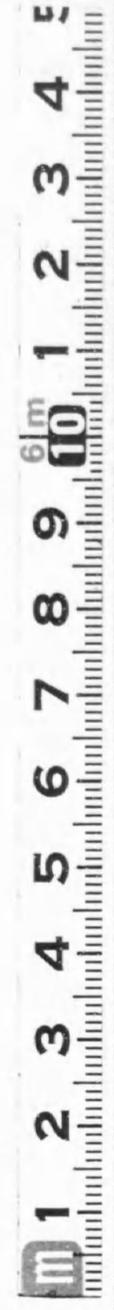


始



CONSTRUCTIVE STUDY OF
ENGLISH

英文構成の基礎研究 下卷

特 217
637

CONSTRUCTIVE STUDY OF
ENGLISH



英文構成の基礎研究

下卷



英文構成の基礎研究 下巻

目 次

- 第十三課 ファシズムの意義 1
- 第十四課 日本民族の实质 21

英文構成の基礎研究 下巻

第十三課 ファシズムの意義

新しい社会秩序の予言といふものは、衰亡に近き秩序の命脈を見くびる誤謬を、冒すのが普通である。フレデリック・エンゲルスは十九世紀の中葉に於て、英國資本主義は五年経てば、革命に直面するといふことを信じてゐた。然るにその後予言から既に、殆んど一世紀近くも経過してしまつた。しかも英國の社会組織は病的ではあるが、西方世界の如何なる國民經濟主義よりも、長く存続し得るのである。かゝる予言の誤謬は普通、社会不正は存続すべきものに非ずといふ理由から、將來の滅亡を想像する所の道德的感情から生ずるものである。歴史はその進行過程に於て假借なきものであると同じ程度に、寛大な点もあるし、且又弱肉強食的な生活に對して、否定的判断を下すことは尙違つてはゐないが、之と同じ程度に歴史は判断を下すに就いて、なかなかはかどらないと云ふ様な事柄は認められない。主要な判断方法は唯程度が緩慢ならば、之を形作る事が出来るのである。それは不正義を犠牲にすると云ふ義憤によつて創り出されるものである。而して重壓に苦しむ世界の人々は、常に壯烈な反逆を

行ふよりは寧ろ堪え忍ぶ傾向がある。彼等はその驕憤を表すことは洵に緩慢であつて、自ら政治的根柢を作ることは更に緩慢であつた。従つて社会悪に対する判断批判は、その社会悪が我慢ならぬ割合に堆積してしまつてから下されたに過ぎない。かくて歴史は自然と同じく役に立たぬか又は危険であるかを歴史が知るに至つた事柄を、撃破するのも緩慢であるし、又それが撃破するに至つた事柄を葬るのも更に緩慢である。かゝる理由から嘗ては生存してゐたが、今は死んでしまつてゐるものの腐敗せる残骸が、きちんと埋葬されないうちは、社会に辱し悪疫を創り出すのである。

衰亡に近き社会制度は、寧ろその破壊道具が漸進的に形作られるからばかりでなく、新時代実現の予言よりもそれが更に強靱な繊維から出来てゐるから、ゆつくり崩解してゆくのである。氣息奄々たる社会制度は老衰病者がその力を消耗してしまつて、敵が自分に致命的な傷を負はしてしまつてから後も、尚いつまでも死といふものを無視する。

社会制度といふものは、結局病氣の存在を認める迄は幾月も患ふ病氣を、無視する健康な体格を有する人間の様なものである。その時でさへまだ彼は有能な医師の厳格な養生法に服従するより、寧ろ売藥で実験してみることを選ぶのである。不承無承患者に診てもら

うから、患者は熱に浮かされて患者の命令を屢々無理する。そしてその熱は屢々死に先立つてやつて來るもので、寧ろ新しい活力の幻影を映へるに過ぎない。ファシストの冒險は死に先立つ精神朦朧状態といふ比喻によつて、最も適合した特徴を持つてゐる。近代資本主義國民の大部分は最後の屈服に到らぬうちに、ファシスト的冒險に乗り出す運命を持つ様に思はれる。彼等國民は衰亡に瀕した社会制度の死を、更に一層不可避的に一層苦痛多きものにするけれども、最後の力を振りかざして、直接生ずる崩解から免れんとするのである。衰亡に瀕した制度は、王權の笏が自分にお鉢が廻りそこねたと感ずる時、益々性悪に暴虐に残忍になり、恐怖と嫉妬とに刺激されて、捨鉢な最後の努力によつて、その衰へた力を隠蔽せんとする戦士の首領に類似してゐる。

滅亡に近い社会制度の醫者たるジエ、エム、ケインズ、スチュアート、チーセス、アーサー、ソールタース並びに大多数の自由經濟の意見を有する人々は、計画經濟を無政府に換へんとすること、及び生活水準を高めることによつて失業を除去すること、並びに更に一層自由な國際貿易によつて、戦争の危険を避けんとすること等を目標としてゐる。然しそれにも拘らず危殆に瀕した現代の寡頭政治は、此の自由經濟の意見

の甘美な安当性に対して、口先だけ力は盡すけれども結局ファシズムの方向を辿って流れてゆく。捨鉢な冒險によつて衰へた力を隠蔽することの方が、慎重な力の使用制限によつてその衰頹を阻止することよりも、更に自然であるが故に、このファシズム的傾向は避けられないのである。

¹⁴⁴頁 現代の金融界及び産業界の大立物は、自分等が危殆に瀕してゐることを知るならば、先づ第一に国内のその政治権力を鞏固にせんと努める。今迄は彼等の政治的支配は間接的なものに過ぎなかつた。近代資本家は決して公然たる政治的支配者ではなかつた。近代資本家は舞台の背後から、政治的デモクラシーの過程を操ることに満足して来た。然し恐慌時に於てはデモクラシ主義は制限されねばならぬ。デモクラシは嘗ては以前の資本主義的封建的な敵を撃破する爲に大いに役立ったのである。然しこれはプロレタリアといふ資本主義の敵によつて、その引続き保持せられたものを、都合よくする爲に容易に専有され得るのである。デモクラシーは経済社会に於ける地位に関係なく、單なる投票者としての投票者に対して、有力な政治努力を附与する。特権のある投票者よりも、貪しい投票者の方が増加して以來、投票紙は國家の器用を、特権剝奪者の掌中に任せる爲の道具となり得ることは常に可能性が

ある。成程實際に投票紙は、政治社会に代つて嚴しい税政策に依る経済社会の平等ならざる者を、平等にする目的を果して来た。急峻な段階の高下をつけた相続権及び所得税は、貪しき者に対する社会的貢献を備へる爲に、使用されて来た。

古い社会秩序が完全に、ぶちこはれない限り、貪¹⁴⁵人の投票紙は経済的所有権を制限する爲に、之を使用し得るけれども、之はその所有権を破壊する爲に行使することは殆んど出来ない。宣傳力や既存秩序の威力といふものは、貪困者大衆の究極の利益とは相反した投票に対して、彼等を納得せしめることを、これらの力に頼ることの出来るものである。

然し乍ら旧秩序の崩解が明白な段階に達して来たので、傳統的な忠節や妄信は攪乱され、旧秩序に於て具体化された假定を疑問ありと承認するに至つた。又民衆主義は實際旧秩序に対して危険となり、これは何か言抜けが又は之に類する他の物によつて、廢棄せられる。独乙の副総理であるフオン、パーペン氏は、最近の演説に於て宣言して「國家の統一は上層から成就せられるものである。無政府主義的¹⁴⁶的¹⁴⁷な加下層から出来るものである。幸にして國家社会主義は、挙國一致の理想に向つて庶民大衆を獲得することが出来る様になつた。然し我々は再びかゝる奇蹟が起ることを期待

してはならぬ。我々は組織なき庶民大衆（烏合の衆）の中に存する無秩序の危険に対して、吾人を保護すべき組織を必要とする」と述べた。フオン、パーペン氏の告白が興味のある理由は、その卒直なるデモクラシー非認に存するのみならず、デモクラシーの特徴ある成果たるヒットラーデモクラシーが、一般デモクラシー理論の模範^{146頁}に役立つ道具となったことを、認めたとある。

滅びかかった資本主義は、その敵の掌中から武器を奪は人が為のみならず、資本主義の有する無政府状態から自己救済をなさんが為、廢棄又は制限的デモクラシーの必要を感じてゐる現状である。放任主義を認める資本主義の自由競争は、危機に直面して危険な賭事となつて来る。従つて之に代るものは國家資本主義であつて、この中に國家は自由を制限し、旧財産制度の弱点を擁護するのである。政治的發展が明らかにファシストとならない時でも、國家資本主義を旧自由放任主義經濟に置き換へる傾向は、英國や米國の例に見る通り、明瞭である。

伊太利に於ては土地所有貴族は、政治に参與するか又は少くとも、之と密接な關係にある。独乙に於ては土地所有貴族は、ファシズムの勢力獲得を助けたが、將來その評議参画から除外せられてしまった。土地を

所有する上流社会の指導者であるフゲンベルグは、政府から放逐せられ、ホブルジョアの代表者たるヒットラーやゲッベルスが、政權を明らかに掌握するに至つた。一方ケッゼン^{147頁}は舞台の背後にかくれて、大産業家を代表し、シャハトはライヒスバンク（國立銀行）に於ける銀行家を代表して、半官的勢力を保持してゐる。独乙に於けるファシズム的政治組織は、かくて更に下の中層階級から徴募した素人軍隊に依存し、旧軍閥に対しては伊太利の場合程あまり頼りにすることはなかつた。但し兩者の場合はいづれも、私設政党的軍隊は旧國家の治安力を増大するに至つた。

崩解しつつある社会秩序の階級闘争は、暫くはファシズム中に解決される。即ち一部には國民的病的興奮により、又一部には過激派及びプロレタリアの集団に對抗して、実力を行使することによつて解決される。かくてファシズムは国内統一を維持する為、陸軍兵力と共に民衆籠絡の手並を併せ用ひるのである。デモクラシーは國民的感情に向つて全國民を鼓舞する為に必要なのみならず、更に下の中流階級を混乱せしめて、彼等大衆の力を、危殆に瀕した産業的金融的支配者の政治目的に利用する為にも必要である。独乙ファシズムの場合に於ては、ヒットラーは革命を恐怖してゐる大産業家の資金を使用して来た。これは貧困化さ

れた中流階級から、私設軍隊を徴集せんが為である。その中流階級は革命を約束されて居たものである。プロレタリアの過激派が中流階級と折衝をつけるのに失敗したことは、之に加ふるに中流階級の自然的な政治的不能とが、大産業家と中流階級の不満大衆との此の奇妙な聯合をなす基礎を確立するのである。かゝる聯繫は殆んど鞏固な力となる基礎とはなり得ないといふことは、既に独乙に於て表れてゐる。独乙に於ては不満を持つ「嵐の騎兵」達は、「第^{148頁}二革命」を口にして且夢見てゐる。而して懸念してゐる政府は、「ナチス革命」に不信任を齎す様な、かゝる意見を阻止するのである。

ファシズムは近代文明が惱んでゐる國際問題を一層悪化させる。而して國家統一の崩解を阻止するその氣狂じみた努力は、結局これまでの紛争以上に更に血腥い、国内政治紛争の最後の崩解をなし得るに過ぎないのである。國際問題が一層悪化される理由は、國家自給自足のファシスト經濟並びに國民感情の籠絡的利用とが、ファシヨの經濟的動機を隠蔽する目的を以て、國際平和を、假りにこれが全く不可能なるものであるとしても、一層困難ならしめるに因るのである。例へばヒットラー治下の独乙が、如何にして佛蘭西や波蘭土との戦争を、最後に避け得るかを知ることは困難で

ある。

ファシズムは強制力を峻烈に行使したり、庶民の病的興奮を手加減したりして、暫くの間は国内の破綻を弥縫する。然し政治は單に強制のみでは、存続し得べきものではない。政治権力は強制力に頼ると同じ程度に、崇敬の徳に頼るものなり。(註→ 敬は愛に対するもの。東洋に於ては政治の要諦は仁愛に發す。我が日本に於ては神話の思想に於て之を「めぐみ」の最高道徳に發す。今日も尚我が國民の中心的規範たるべし。日本民族が國家成立の要因を太古に於て、此處に具現したるは誇とするに足る。但し林内閣の所謂神が、り政治はどうかと思ふ。それはさておき今日の文明諸國中には、その民族が太古に於て「仁愛」とか「めぐみ」に類する、英語ならば“charity”と云ふ語さへ有せざりしものもありしに拘らず、我が國之を有するは今後益々之を、哲學的に政治と關聯して考ふべき点かと思ふ。儒教に於ては「仁を以て政を行へば、令せずと雖も政行はる。」と云ひ、又一面「仁を仮り力を以て政を行へば、令すと雖も政行はれず」とも云へり。原文と対照して興味多かるべし)ファシストの宣傳は「支配者」又は「統治者」に対する、浪漫的な姿勢を養成して、崇敬の要素を興へんと試みてゐる。然しこの浪漫主義は時代錯誤である。上は王権の傳統的專制

威光、並びに下は臣民の崇敬的忠節は、最も賢明な抜目のない宣傳を以てしても簡単に之を再び創ることは出来ないのである。独裁君主の要求は太古からの傳統的支持によつて、これが確實性を全ふしなければ、愚にもつかぬものである。而して傳統は之と性の合つた文化のうち安置せられねばならぬ。近代ファシズムは古い專制的虚飾を、復興せしめんと試みてゐる。然しその努力と、專制的な勿体振りを表す政治的な礼拝式との間の差違は、安撫な芝居と印象的な戯との間の差違みたいなものである。

更に論鋒を進めば、少くとも独乙に於ても、又恐らくファシズムを自國に試みんとする。他の先進産業國に於ても、農民なら之に訴へることは出来ても、プロレタリアには何等受け容れられない所の專政的勿体振りに依つては、説落すことも出来ず、且又ファッショ的恐怖に依つて、嚇して服従されることも出来ない不逞労働者を、廢置しなければならぬのである。労働者は暫くの間は独裁に対して、強制的に服従せしめられるけれども、労働者の不満は支配権力に対して、絶えず脅威を残し、又労働者の敵が矛盾した自潰的均合に到達する迄は、増大しつゝある政治的圧迫に依つて、之を撃破せんとする誘惑を永久に残してゐる。

従てファシズムの計略的な結果は、資本主義の最後

は平和に非ずして、寧ろ血腥いものになるといふこと^{150頁}を、保証されてゐる筈である。民主主義的條件で近代社会の紛争を、解決する究極の見込を破壊する事によつて、ファシズムはこの紛争の革命的結束を、確定的にしてしまふのである。独乙のファシヨ的冒險が次の戦争が起らぬうちに、革命に還元しないとしても、ファッショ自ら戦争の發生を助長する筈のその戦争中に於て、独乙のファシズムは崩壊すべきことは、殆んど確定的である。何となればファッショの成し遂げた國內統一は、余りに人為的なもので戦争に長持ちはしないからである。戦争は單に、國際的戦争を内亂に転化せしめる機会を喜んで望んでゐる所の、被壓迫不逞の大衆の掌中に、武器を渡すに過ぎないのである。現在徴募されてゐるファッショの「嵐の軍隊」から出でた集團のうちにも、現在彼等が鎮圧しつゝある過激派努力と闘争中に於て、相提携するものもあるかも知れぬとは、当然合点し得られることである。資本家と戦ふ爲に、ファシズムをして不満を持つ中流階級の利用を、可能ならしめる所の、反動的感情と革命的感情との間に巧妙に組立てられた妥協が、戦争の緊迫と重圧とに長持ちするとは、殆んど考へ得られぬことである。

封建的大名とは違つて、金融寡頭政治家は直接自己の戦端に立ちもせず、又自分が支配する國家に君臨す

るものでもない。彼等は一方には國家に君臨し、他方に於ては社會制度の崩解に依つて、貧困化せられた不満大家から、自己の軍隊を徵募せんとする二つの民衆籠絡を^{151頁}隠蔽しなければならぬ。若し彼等寡頭政治家がその隠蔽的民衆籠絡によつて創り出された-----の勢力の不忠節を通じて、最後に潰滅せられるものとするれば、寧ろそれは適當な歴史的正義であらう。民衆籠絡がデモクラシーに対する邪惡であるからには、自己の利益の爲にデモクラシーを利用したり、又之を腐敗せしめたりして、之に依つて生活し支配權を握つてゐたと同様に、デモクラシーの理想の壊乱を通じて彼等金融寡頭政治家は、不名誉な最後に到達することになるであらう。

語句の研究

page 141

lenient (寛大な)

inexorable (inéksoyabl) (頼んでも受け容れぬ、頑固な), exorable (頼めばきく、心を動かぬ易い)

instrument (道具、方便、手段)

predatory (掠奪的), fashion (形作る)

rebellion (反逆)

page 142

cumulated (堆積した), intolerable (堪え難き) inter (葬る), putrid (腐敗せる)

decently (礼儀正しく、端正に)

pestilence (悪疫)

moribund = dying (衰亡に瀕した、せびかつた) disintegrate (崩解する),

fibre (繊維)

tougher (強靱な), defy (無視する)

senility (高令、老年)

ignore (無視する)

submit to (服従する)

rigorous regimen (厳格な養生法)

nastrum (売藥、秘藥)

competent (有能な)

tardily (不承無承に)

in the delirium of fever (熱に浮かされて、精神朦朧として)

page 143

destine (運命を持つ、将来を決定する)

succumb (屈服する)

aptly (適合しく)

metaphor (比喻), chieflain (首領)
 immediate (直ちに), crabbed (性悪な)
 tyrannical (暴虐な), brutal (残忍な)
 last effort of desperate courage (捨身の
 暴勇を持つ最後の努力), inspire (刺激する)

host = large number (多数)

Counsel (意見, 企図) = intention, plan

substitute = pun in exchange (取り換
 へる) (代用する) — for を伴ふ

anarchy = absence of government (無
 政府主義)

eliminate = get rid of (除去する)

imperilled (危殆に瀕した)

oligarchy (寡頭政治)

dribo (漂流), nevertheless = notwith-
 standing arrest (阻止する)

decay (衰頹), prudent (慎重な)

Page 144

consolidate (鞏固にする, 統制する, 合併す
 る)

overt (公然の, 歴然たる)

manipulate (操る)

behind the scenes (舞台にかくれて)

circumscribe (制限する)

erstwhile = at a time past, former
 (以前の) in another age (昔は)

appropriate (専有する)

to make advisable (都合よくする)

privileged (特権のある)

ballot (投票に用ひる球, 投票紙)

the disinherited (相続権剥奪者) こゝでは
 (プロレタリア) = the poor の意味である。

rigorous (厳しい)

on the part of (〜に代つて)

steeply graded (急峻な高下をつけた)

page 145

prestige (威力)

Contrary to (〜に相反する)

obvious stage (明白なる段階)

traditional loyalties (伝統的な忠節)

presupposition (假定)

subterfuge (言抜け, ごまかし)

The unity of the state (國家統一)

Ex. national unity (挙国一致)

Vice-Chancellor (副総理)

from above — 元来は(天国から)の意味だが、
 こゝでは上層階級から仕の意味で from below に

対す。 *the masses* (庶民大衆)

chaos (カオス) (無秩序, 無政府状態)

residing = existing (存在する)

disavowal (disavānal) (非認)

page 146

destruction (撲滅)

laissez-faire (léiseifε) 商工業の
(放任主義) *hazard* (賭事), (危険) 位に訳せば

よい。 *avowedly* (公然と, 明らかに)

the landed aristocracy (土地を所有する貴族)

participate in the regime (政治に参加する)

friendly to the regime (政治と密接な関係を有す)

gentry (上流社会) 英国では (貴族平民間の中間階級) を指す。

dismissed from the government (政府から放逐する), (罷免する)

petty bourgeoisie (buɔɔwa:zi:)
所謂 (プチブルジョア) の事で *petty* は (小なる) の意味で, *bourgeoisie* は佛語から来た英語 (有産階級)。

authority (権能) で (当局) と訳す場合は複数

EX. *Tokyo municipal authorities* (東京市当局) *semi-official* (半官的な)

Reichsbank (独乙国立銀行)

recruit (徴募する) 兵隊を。

page 147

military castes (軍内階級)

caste (カースト) = *hereditary class*
(世襲階級)

augment (ɔ:ɡmɔnt) = *enlarge* (増大する)

hysteria (histi:ri:ə) = *morbid excitement* (病的興奮)

radical (過激な) 思想的に。

demagogic skill (民衆を籠絡する手並)

confuse (混乱せしめる)

exploit (喰物にする, 利用する)

impoverished = made poor (食困化された)

to come to terms (話をまとめる, 折合ふ)

discontented masses (不満大衆)

"*storm troopers*" (嵐の軍隊)

stable = firmly established (鞏固な)

Page 148

discourage = deter (阻止する)

sentiments (情, 感情, 心持)

EX. the sentiment of patriotism

(愛国の情)

discredit on "the revolution" (十ヶ
ス革命不信任)

aggravate (更に悪化させる)

frantic effort (気狂じみた努力)

sanguinary (殺伐な, 血腥き)

they might otherwise have been
(他に今まであった紛争)のことを云ふ

obscure (曖昧にする, 隠蔽する)

heal (治癒する)

internal breach (国内破綻)

sheer use of force (峻烈なる強行)

manipulation (手加減)

rest upon = rely upon (当てる, 頼
る)

reverence (崇敬)

reverential (崇敬的な)

Der Fuehrer = Il Duce = the chief

(指導者)

romantic attitude (浪漫的な姿勢, 態度)

anachronistic (時代錯誤), prestige (威
光)

Page 149

monarch (専制)

astute propaganda (抜目のない宣傳)

autocrat (独裁君主)

preposterous (愚にもつかぬ, 突止千万な)

credibility (確実性, 信ずるに足る)

imbed (安置する)

Congenial to (性の合った)

resuscitate (蘇生さす, 復興さす)

pageantry (装飾), presumably (多分)

liturgy (礼拝式) rebellions (不逞の)

pretension (勿体振り), cow (嚇す, 脅かす)

theatricality (芝居)

to be won by (〜に依って説得す, 味方
に入れる)

dictatorship (独裁), disaffection (不満)

oppression (圧迫), absurd (矛盾せる)

self-defeating (自潰的な)

to be resolved in a revolution
(革命に還元する)

generate (生ずる, 発生せしむ)

outlast a war (戦争に長持ちする)

suppressed rebellions multitudes
(鎮圧された不逞な民衆) (弾圧された不逞な民衆)

civil conflict = civil war (内乱)

to make common cause ~ with (提携する, 党する)

artfully constructed compromise (巧妙に組織された妥協), *reactionary* (反動的な)

strain (緊迫), *stress* (重圧)

reign in the state (その国に君臨する)

page 151

disloyalty (不忠)

ignominious (不名誉な, 賤むべき)

exploit (自己の利益の爲に利用する)

corrupt (腐敗さす, 壊乱さす, 汚す)

第十四課 日本民族の實質

伯壽 後藤新平

日本民族の實質はまだ世界に諒解されてゐない。泰西の文明は基督教に根據を有し、一方東洋はその基礎として仏教と儒教を有するとは、陳腐な云ひ方である。地理的には日本は東洋に屬してゐるけれども、日本は決して普通の東洋的国家ではない。世界に於ける何れの國民もその一般的特徴や独特な風格を有し、日本はその独特な風格に於て豊富である。恐らくその島國的位置に位してゐる結果であらう。而してこれが爲に、他國の影響を多く蒙らずに發展してゆく事が出来たのであらう。従つて理想や風俗習慣の点で、日本は他の文明國と非常に異つてゐるので、屢々他國の誤解を招くに至つたのである。

日本は諸外國と類似の習慣を多數有してゐるけれども、日本文明の發展を導いて来た原則に就いて、智識がなければ、日本を理解することは困難であらう。この原則は我々が「大和魂」と稱するものである。

^{162頁}
現代の世の中の智者といふものは、賢くない。学者は宇宙の眞理をつかむのに、あまりに學問に拘泥し過ぎる。眞理を見極め得る者は、無學な人である場合は珍らしくもない。此の意味に於て學問のある者は、單に、

万物創造の神の奴僕に過ぎないのである。無学の者は神の直屬の従者である。日本の建國は「神の直接の従者」である所の神武天皇の据え給ふ所である。而して家屋といふものは、學者に依つて後年附加せられたのである。佛教や儒教は我が國の文化に、大いに貢獻したのは事實である。然し「大和魂」は太古から存在したものである。何となれば日本國民は、その教導に依つて同化されたと云ふよりは、寧ろ日本國民がその教導を同化したのである。儒教は日本に於て偉大な發展をした事は、充分之を説明するものである。支那の大哲人が幾世紀か後に至つて、日本に再び生れたものと仮定すれば、その哲人の理論が我々の手に受け入れられ、同化されたのを見て驚くであらう。佛教は此の國に於て見事な完成に達したと、言ふも決して過言ではない。今日日本に在る佛教は、所謂「原始佛教」とは甚だ異つた信仰体系である。

「大和魂」は日本文明の独特な發展をなす素因となつた。西洋人は日本文明を、自分等の文明より劣つてゐるものとして、輕視する傾きがある。又は奇蹟的な現象として、之に驚かされる傾向があるけれども、彼等西洋人の侮蔑も驚きも、單に日本歴史の智識が缺けてゐる爲である。西洋文明と我々の文明との根本的な差違は、發展の過程の差違の中に存在するものである。

これを宗教的藝術に依つて説明しよう。蒸西に於ては、科學的見地から研究に苦心して、美術評論家は、宗教藝術の名作は信仰深き敬虔な作者の手に依る所産だといふ決論に達した。然し乍ら古代の日本藝術家は直覺に依つて之を知つたのである。神聖な佛畫や佛像は、氷垢離をしなければ、之を製作することが出来ない事實は、日本の古代藝術家に於ける傳統である。

美点を有する日本の物を好む人達は、「出目の面」と稱する一種の打ち面を聞いたことがあらう。かゝる打ち面を最初に打つた人の血統は、今日に至る迄十年以上も続いてゐる。その家の傳統的職業を支配する秘めたる戒律といふものがある。「物差を使つてはならぬ。それは汝の腕を活かすものではない」と謂ふのがそれである。職人といふ者は物差は眼中に置いてゐない。彼は吾人の所謂「神の直接の従者」である。彼は日本の独特の文明である日本主義を象徴するものである。それは丁度今述べた言葉の中に具体化された精神である。それは日本に輸入されて来た總てのものを同化してしまつた。此處に日本の國民性の著しい特徴がある。

我々は好戰的な危険な國民として、烙印を押される場合がある。更に露骨な批判は、あだかも我々が人道と文明の敵であるかの如く、「黃禍の危険」を聲を大

にして叫んでゐる。赤十字野戦病院部は、今日も在るが、1863年のジュネーヴ會議に依つて組織された。此の人道的機關の根本義が、既に十一世紀に於て日本人自ら之を認めたるものであることを知るのは、日本に關する無慈悲な批判に対して裨益するものである。西暦1050年から1080年までの間に、本州の北東部地方に住む東夷を討つ爲に、「前九年の役」と「後三年の役」と、日本歴史に於て謂はれる二つの長い戦争があつた。(訳者註1—以上の西暦年数を換算すると皇紀1721年から1740年になるが、前九年の役の終末即ち源義家が、厨川に於て安倍貞任を亡ぼし宗任を捕虜にしたのは、後冷泉天皇(第七十代)の康平五年、皇紀1722年に當るので、1740年に内戦した事になる。又後三年の役即ち例の「雁の乱る」を知つて野に伏兵あるを知つた」金沢城(今の秋田縣)の戦争で有名な此の戦争は、堀河天皇の寛治元年、皇紀1747年に、義家は清原武衡を亡ぼして、鎮定した。故に正しく云へば皇紀1740年から1747年即ち西暦1054年から1087年迄である)。後三年の役に於て我が官軍の大將八幡太郎義家は、敵の大將と即興詩を戰場に於て交換し、その結果は義家の歌の一節に感動せられた我が勇士達は矢を射るを止めて、逃げ始めた敵の命を救つてやつた、といふ事實は一つ

の美談である。(訳者註2—原文に *a fine episode of the latter war* 即ち後三年の役の美談といふ事になるが、これも訳者の首肯し得ざる所である。恐らく読者も同感であらう。この美談といふものは小学校の國定國史教科書に於てさへ、前九年の役に於ける衣川の戦の一挿話であると記されて居る。日本歴史に興味を絶えず持つてゐる訳者の記憶では次の通りと確信してゐる。衣川は今の岩手縣の南部にあつて、敵の本城は所謂衣川の館で小高い岡の上に在り、北に衣川東に北上川を控へ、守りに易く攻むるに難き要害の地であつた。これを攻むるに先立って義家はこの前九年の役の最初に、雪中行軍の失敗から貞任等の爲に味方を射殺され、主従僅かに七騎、敵を斬つて斬つて斬りまくり圍を逃れたことがあつた。——由來源氏は七騎を吉とし、八騎を不吉とした。逃びのびたから吉であらう。その例は謡曲の修羅物などによく散見する。——それは扱て置き義家はこの失敗にこりて、出羽の豪族清原武則の助を得て、之に力を得て衣川の館を攻めた。夜中ひそかに館に火を放つたので貞任は耐へ兼ね、逃ぐるを追ひて義家は駿馬の上から、一矢に射殺さんとした時、ふと歌の下の句が滑び例の「衣のたてはほころびにけり」と、詠みしを貞任振りかへつて「年を経し氷の乱れの苦しさに」と、詠み返へし

て上の句を作ったので、感動したのは義家であり、矢をはづして見逃してやったのも義家であつて、決して原文の様に *our warriors touched by yoshiyue's lines, stayed their arrows and saved their enemy* ではない。しかも前九年の役と間違へるなんて憤飯に耐へない。訳者は之を黙殺するに忍びず、特にこの一論は後藤伯としてあるが、英文に書いた人は誰れが知らぬが、少くとも之を以て日本文化の優秀性を諸外国に示さん為、記されたものとすれば、もつと良心的に調査研究すべきである。我々が通常信じてゐる物語りの通りに、之を海外に紹介したいものだ。異説を傳へる対外的影響を考慮したい。日本人であり乍ら屢々日本の事を忘れてしまひ、又は全然知らずして、言葉だけは流暢な英語で出鱈目を、渡来外人に紹介する場面を他にも訳者は目撃したことがある。例へば油絵は明治維新直後外國心酔の時代に輸出されたと説くのは誤りであつて、既に戦國時代の終り信長の頃に輸入された。当時の作物は現今少いが、皇室博物館に遺されてゐるものに油絵を以て画いた「だるま」や基督の像もあり、狩野派の画風を混へた当時の國民的海外発展の気分が表現されたものである。牛乳やバター等も明治以後の輸入ではなく一千二百年も前に聖武天皇の頃医薬として使用されて

る。光明皇后は之を施薬院に於て病める人々に分ち与へられた。百濟からの傳来であることは間違ない。三味線や尺八もエジプトに起源を發し印度支那を経て、東漸して来たと田辺尚雄氏は説く。通説であらう。然し日本文化の最も古い産物は製鉄と、陶磁器であり、恐らく泰西のものよりも古いと信ずる。既に神話に劍の事を我々は知り、垂仁天皇の御宇に埴輪といふ焼物を有し、人類学上より見るも本郷正弥生町に發見せられた所謂「弥生式土器」を、我々は有する。埴輪は彫刻絵画とも関係あり、製鉄に至つては実に我が國固有の文化である。その古代製法の一端を述べると、先づ花崗岩を砕いて、酸化鉄を含む砂となし、水流に之を流して下に沈澱する鉄分を集め、かくすること數回繰り返すうちに含有量の多い砂鉄を得る。之を古來「真砂」「赤目」と稱する。森林を喫し良質の木材を以て木炭を作り、この炭素の還元法を利用して真砂、赤目から鉄分を遊離せしめて、優良な鋼鉄を得た。勿論此の場合の空氣を送る方法は、戸板を踏んで風をあぶり日本固有の竹の管で炉に送つたのである。かくして不淨を隔つる七重の注連を張り廻らし、四方に本導をかけ奉り、幣帛を拵けてちやうちやうと鋸を打つて鍛鍊したのである。而して我が國特有の氏族制度は職業を世襲とし、家傳を子孫に傳へて不斷に之を進歩発展せ

しめた。且物質の製産者は社会に重要せられて、或は録を給せられて衣食の憂を全くなくしたことは、今日の資本主義社会の勤勞職人と異つて、益々藝術的良心と神技とを遺憾なく發揮した。全くこれは一に生活の安定に由来するものである。他面に職業世襲の長所でもある。今後の日本の社会改造は一にかゝつて工人のかゝる環境をも、独創的に打ち建てねばならぬと信ずる。今日の形式的な物質的な資本主義社会に於ては、終に万国に比美なき能面打ちは滅び、鼓はもはや價值あるものを製作するものがない。凡そ進化の理論は日本刀の製作には適用されないではないか。古刀に至る程優秀である。商賈価値として唯売らん哉と云ふ職人氣質では、神技は表れない。この資本主義の害悪を克服することこそ亦日本民族の独創とならねばならぬ。常に日本民族は客観的な形式を克服し、主観的な信仰的なものを持ちつゝ、超自然的なものを産み出しつゝ、自然的な物質的な科学の領域を併せ兼收備へてゐる。傳統と経験と直観を以て科学と、きちんと調和してゐる事は驚くべきものがある。日本文化は決して寫實的模倣的ではなく、常に印象的で超自然的で、不斷に独創を続けてゐる。絵画彫刻を少くとも佛教傳來以前のものから、飛鳥朝時代奈良時代を通じて、平安時代ポルトガル人の来航を経て現代に至る迄、検討すれば日

本人なら急速に理解し得る点である。明治維新直後の旧物破壊は可なり今日では復活してゐるが、中には全く滅びたものがあるのを更に創建すべきものがある。日本は今日起源を他國に滅んでゐるものを、多数保存してゐる。故に日本文化は全世界の博物館なりと私は信じてゐる。吾人日本人が日本固有のものと思ひ、且事實に於てその通りであるが、それらの起源は外國に於て二千年三千年時には五十年の昔のものを、よく同化して模倣の過程を速に創造の領域に發達せしめて保存して居る。例へば三味線はエジプトのものを琉球から傳へたものであり、味噌汁は支那傳來であり、うどん天ぷら煙草は南蛮渡來であり、宮中の雅樂は唐の宮廷より我が宮廷に傳つて保存されてゐる。しかも尾形光琳の繪画廣重の風景画は徳川時代に既に佛蘭西画壇に教訓を与へてゐるのである。政羅巴の惱みは我が國に彼等の留學する事から出發して解決される。何となれば我々は平和と自然美を、愛好する國民であり外交的國際的國民であるからである。聖徳太子は「日出づる國の天子書を日没する國の天子に至す、恙なきや」と仰せられて唐と外交を興がせられ、平清盛は兵庫の港を開いて貿易を行つたではないか。部民を従へて大率我が國に歸化した外國人は既に應神天皇又は雄略天皇の頃にあつたことは、歴史の証する所である。三

浦安針や小泉八雲の様な日本人もあつたではないか。日本橋三越の筋向ひの小路を入れば、左側に、歸化西洋人の祀があるのを知る人は少い様だ。日本文化に貢献し全く日本人に歸化した人格を、将来も祀つて夏祭秋祭りに江戸っ子が神輿をかつぐ事があつてもよい。日本固有の仁愛の徳即ちめぐみの最高道徳を、世界に進出せしめて人類の平和幸福を發展せしめるのが、吾人の使命である。我々は文武両道を具へた、平和創造の國民であり、純正潔白な熱烈燃ゆるが如き文化の建設者であることを誇りとする。愛國の至誠は文化創造の具現である。この祖宗の遺訓を忘れざらん爲に、我々は全國に十一万一千百八十六の公式神社を有し、國民の若きも老いたるも、総人口中六百二十三人中一社を有するのである。更に非公式の神神を合はせば恐らく國民の数十人に一社を持つことにもならう。文化幸福の増進は亦政治の大本である。祖宗は之を行ひ之を継承した現代の日本人は、祖宗の神神を祀る。即ち神を祭ると政治とは一致する所以である。或歴史家に依るとこの神話は、作り話だとなす者もある。それは何れであるにせよ、これは古代日本に於て、うち建てられた人道主義の良き證明である。即ち義家が情ある武^{165頁}神として、神に祀られた事や、帝國の各地に義家の靈を祀つた神社が散在する事がそれである。

私は嘗て高野山に登つたことがある。そしてその頂上に一つの古い石碑を見た。高さ六呎幅約二呎六寸の石碑であつた。それは高津義弘とその子忠恒に依つて建立せられた。彼等は犬陶秀吉の朝鮮征伐に加つた。片面の碑銘は「慶長……年我等斬首三万余級」とあり、(訳者註— 碑銘そのまゝは記憶せず。然し日本外史蓋臣編中に「義弘、忠恒追奔逐」北。斬首三万余級。」とある。この碑銘があつた爲、日本が赤十字社加入を容易にしたことは有名である。従つて慶長三年といふことになる。)他の片面には「願はくは敵も味方も戦死者を葬ひ涅槃に入るを希ふ」と記されてゐる。苦しんで居る敵を介抱することと同じく、殺された敵の爲に碑を建て、且施行をなすことは、人道的感情の立派な精華であつた。この高津父子はナイケンゲールに優るものではないにしても、ナイケンゲールに先鞭を着けたものと云はねばならぬ。

更に私は我が國小説中の最も大作である一小説を挙げ、日本の人道主義を説明致さう。私は田亭馬琴の作である八犬傳を撰んでみる。此の文豪はゲーテやユーゴー又はシェクスピヤに比較して、決して小さい人物ではない様だと、屢々言はれる處である。洵に不幸な事には彼の名前は殆んど海外には知られてゐない。これは日本文学が未だ充余世界に、紹介せられてゐな

い馬である。万一西洋人が之を研究するに至るならば恐らくさうなるだらう。馬琴は是等の同僚と同じ程度の名声を博するであらう。何れにしても私の見る所では、馬琴は大作家であることは勿論のこと、大思想家でもある。南総里八犬傳に登場する犬江親兵衛（乳名は眞平）は、伏姫といふ理想化された婦人からもらった藥を懐中にしておる。この藥は観音（慈悲円満な如來）の利益に依つて傷を癒すのみならず、傷が因で死んだ者を誰でも蘇生させるといふあらかたな靈驗を有してゐる。しかもその藥は汲めども盡きざる泉に似たり。あらありがたの奇蹟あるこの藥を正しく用ふれば敵も味方も水波の隔てなく、家生濟度の方便となる。これぞこの面白き冒険物語の筋に示現するのである。親兵衛が國府台（東京から教理離れた）附近の小川に敵の死骸を発見して、之を蘇生せしめる爲に、その藥を應用することが、その文章の哀を誘ふ力として、有名なこの物語の一節である。

赤十字社の理想が敵も味方も區別なく、博愛家に及ぼすものとするならば、それは何世紀かの間に我が國民に依つて、後世に傳へられたものであり、又實現されたものである。我々を好戦國民と呼ぶことは、重大な誤謬であり、これは西洋人が日本の実情を知らざる爲である。（訳者註——近頃評判の吉川英治作の朝日

新聞連載小説「宮本武藏」の中にもこの思想が現れてゐることに読者も御注意あれ。即ち武藏は多勢の吉岡方の敵に躍り込んで、飛道具を持ってゐる者を背後から、先づ血祭りに上げ、進んで名目人の一少年を松の根方に斬つて捨て、目的を達すれば脱兎の如く敵陣を逃れ去るが、其の後彼は比叡山の一院に籠つて、無念無想の境地に在りて、己が斬り伏せた名目人の少年の爲に菩薩を彫刻するに精恨を打ち込んでその靈を葬はんとする）。

又或者は我が國の文明は、泰西の皮相的な模倣であると思へるものがある。然しかゝる考へと相反した事實は沢山ある。その一は太古から國民の間に普及してゐた人道主義（愛の最高道德）を、日本は持つてゐたことであり、更にも一つは日本は早くも七世紀には成文憲法を有してゐた事實である。現代日本の構成は欧羅巴の器械を模倣した爲、一朝にして出来上つたと想つてゐる西洋人は、西曆六百四年（推古天皇の十二年）に聖德太子は、家族制度に基く國民憲法を御制定になつた事實を學んで驚くであらう。その憲法は多くの点に於て、今日施行されてゐるものと異つてゐることは事實である。然し古文書程少なからず、その特長を有することを主張しても尙益はない。

勿論我々は西洋文明を大いに鑑識する者である。然

し乍ら或意味に於て、我が國文化の美を破壊して、西洋文明を充たすことは出来ない。(訳者註— we can charge ではなく can not charge it の誤りであらう。)孤立した状態で久しく栄えて来た日本民族は、「造物の神の直接の従者」として、独特の発達過程を有して来た。然るに日本民族の実質が、西洋人に明確に理解されてゐないといふことは、一大痛恨事である。(註— It is a great pity ~ should と必ず should を伴ふを文構成の特徴とする。)

EX. { What a pity that he should have failed after such a effort! (こんなに努力したのに失敗するとは残念だ。

should はその他にも "surprised"

"natural" "proper" "strange"

"necessary" "no wonder" 等の語

と共に屢々用ひられることがある。

{ It is quite proper that we should punish him. = 彼を罰することは当然ではないか。

EX. { I am surprised that you could say so. = 君がそんなことを云ふとは驚いた

{ It is natural that he should get angry = 彼の怒るのは当たり前

語句の研究

page 161.

Occidental (oksidéntl) (蒸西の、西洋の)

Confucianism (kōnfjū:sianizm) (儒教)

その形容詞 Confucian (孔子の、儒教の) 時に (儒者、孔子の門弟) ともなる。別に Confucianist (儒者) もある。

insular (insju:l) (島國の)

incur (inkj:i) = bring on (招く、蒙る)

る)

analogous to = similar to (~ に類似の)

institutions = established custom

(習慣、制度)

page 162

adhere to (拘泥する)

letters = learnings 共に複数で(學問)

to read the Word (神の言葉即ち真理を見極める)

vassals of the Creator (造物主即ち上帝の奴僕、使徒)

the simple (不学な者) the + 形容詞は複敬形

immediate attendant (直接の従者)

in the beginning (昔は)

assimilate (同化する), amaze (驚かす)

It is no exaggeration to say (云かも過言に非ず)

despise (軽視する)

Page 163

contempt (侮蔑)

masterpiece (傑作、名作)

devout (敬虔な), intuition (直覚、直観)

ablutions 複敬形 (齋戒沐浴、水垢離)

lineage (Lin:ɪdʒ) (血統、家系、系統)

Japanese objects of virtue (美点のある日本の物)

demenomen 出目と云ふ作者の打った面

precept = commandment (戒律)

secret precept (秘傳)

artisan (a:ɪzɪn) (職人、工人)

Page 164

salient (seɪljənt) = marked (目立った)
to be branded as a bellicose people (好戦国民として烙印を押される) bellicose = warlike.

outspoken (赤裸々な、露骨な)

ambulance (æmˈbjʊləns) (野戦病院)

mercy (慈悲), merciless (無慈悲な)

to wage war (戦争をする)

extempore (即座) = instantly

extemporized なら (即吟の、即座に作った) になる。

ode (oʊd) (抒情詩、短歌)

touched by Yoshiie's lines (義家の歌に感動させられて) 義家が貞任の上の句に感動させられたとするのが歴史家の通説である事は既に説明した通りである。

episode = incidental narrative (挿話) 殆んどエピソードとして日本語化しておく。

fiction (作り話、小説)

deify (di:ɪfaɪ) (神として崇める)

Page 165

dedicate 神殿等を(献納する)で、to dedicate a shrine to ~ は(社を建てて~を祀る)の意。

EX. { The Hitano shrine is dedicated to Sugawara-Michizane. = 北野神社は菅原道真を祀つてある。

(着書を捧ぐの)の意味もある。

EX. { To my mother I dedicate this book with love and gratitude = 愛と感謝とを以てこの書を母に捧ぐ

to one's memory = to the memory of ~ = in memory of = to keep alive the remembrance of ~ (~ の記念に、 ~ の靈に) の意味。

EX. { a stone monument was elected to the memory of the soldiers sailors on board the Hitachi-Maru = 常盤丸乗組陸兵並びに水兵の靈を葬つて記念碑が建立された。

attached to (~ に所属する)

Hideyoshi's expedition (秀吉の第二の朝鮮征伐即ち慶長の役を指す。「特封贈馬日本國王」の文句に秀吉怒つて、皇紀2257年、慶長二年から

翌年死ぬまでに及ぶ。秀吉は御承知の通り徹底した勤王家でもあった。身賤家に生れし彼は晩年その智徳を修養したことは、彼の生立ちに比し実に吾人の教訓とする。例へば大義に通じ趣味も豊かに、茶道や能樂に志した等である)。

Nirvana (nirvāṇa) (涅槃)

in distress (苦んで、遭難して)

flower (精華), forestall (先鞭を着ける) many of letters (文豪、文人墨客)

Hakkenden 所謂「南総里見八犬傳」を云ふ。

南國的な安房國は之によつて一入のゆかしさを増す。訳者は物語を幼い頃から父に屢々聞かされて里見城趾の近くに育てられたこともある。生れたのもこの暖國の海辺である關係から馬琴の偉大さに心を引かれておた。馬琴は四十八才の文化十一年に筆耕五冊を出版し、七十五才の天保十二年にその間二十八年の歲月を経て完成した。九輯、九十八巻、百六冊の抱大な小説である。創作に苦心しくわう間に、家庭的苦惱を一層深め妻も息子の宗伯も病み、馬琴も大病に罹り視力も衰へ終に右眼は失明したが、左眼を力にしておる中に左眼も文化十一年十一月には明暗を弁ずるのみ。万葉盡きて宗伯の末亡人のみちに筆を執らせて口授した。雪庵風笈、血みどろの努力に依つて完成した。漢籍にも明

るい彼は支那小説の趣向を取入れ、「忠義水滸傳」はその骨子をなすといふ。「三國志」、「太平記」、「里見軍記」房総志料」等参考書も多数用いた。卓越した識見と教育的價値を有する小説である。儒教倫理と武士道とその肉とする。伏姫の持つ八つの水晶の珠数は、仁、義、礼、智、忠、信、孝、悌を表す。有朋堂文庫が手頃な解説書であらう。

a wonderful effect (奇妙な靈驗, 奇瑞)
divine favor of Kannon (観音の利益)
heal = restore (癒す), *drug = remedy* (藥)

inexhaustible (盡きざる)

benevolent = merciful (慈悲深き)

comrade (戦友, 同僚), *passage* (文の一節)
resuscitate (蘇生さす), *pathos* (哀を誘ふ力)

without discrimination (区別なく)

to hand down (後世に傳へる)

superficial (皮相的な)

Page 167

written constitution (成文憲法)

propagate (宣傳する) (普及する)

frame (制定する)

in its way (特有な) 位の意味

not a few (少なからざる)

In a sense (或意味に於て)

本文中訳者の肯定し得ざるものは *the Jimmu*, *an immediate attendant of the Creator* (造物主の直接の使徒である神武天皇) なる語句である。私が日本人としての思想から云へば、大八洲國を闢かせ給ひし御方は伊弉諾、伊弉冉の男女の二神であつて、既にこの國土この國民をお創りなれて我等に、愛の最高道徳を具現せられたのである。これが我が日本人の有する思想であり、此處に既に陰陽の道も定つたのである。その御子天照大神は御徳極めて高く蠶を養ひ楡を作る術を万民に授け給ひて、之を御めぐみなされた。此れ又愛の最高道徳を有せられたのである。故に明治天皇も「徳を樹つること深厚なり」と仰せられた所以である。御神勅によつてこの國土國民を御開きになつた二神の直系にまします現人神が、天皇として此の國土を統治し給ふ。故に「造物主の使徒」では断じて我等の黙視し得ざる所である。諸君等は神社の社殿に掲げてある注連繩の意義を意識して見らるゝや。此れは左が細く右が太く且二本の元繩に依

つて纏んである。これ即ち伊弉諾、伊弉冉の男女の二神を、即ち創造を表徴し左の起源より、次第に発展し行く天壤とともに窮なき我が國家の根本思想を表すのである。且注連縄より内は神聖なる神の御座所なることも表してゐるのである。古来この神聖なる場所に於て、日本の文物も作られた。日本刀はかくしてその神技を具象したのである。其處に日本人が穹突的なものを好まず、超自然的な超科学的な文化を打ち建てた理由がある。科学以上のものを建設したのである。鋏や木材や土石の類にも永遠の生命を、吹き込んだ。科学の領域を飛び越えた文化である。劔の威徳は泰西の科学では説明出来ないのである。又作り得ない。ベッセマーの製鉄法も電氣炉の製鉄法も木炭の還元法には及ばない。名人の打つ能樂に於ける大鼓の音は、科学の所産であるトーキーには録音されない神秘的な音であることを最近の録音扱手が知った。録音機械が破壊されるのを恐れたのである。かくて歪曲せられた「癸上」のトーキー能が海外に輸出されたのである。私は反對する。南蠻紅毛の徒にはまだ日本の力はこんなものでは理解されやうもない。私は日本語そのものを、彼等に知らしむるが早道だと信ずる。此の意味に於て駐日民國留學主をして、各大学が日本語を知らずして卒業せしむるを遺憾とする。彼等は眞に日本を知らずして

帰國する。やがて逆宣傳をやる。排日は当分絶滅する筈はない。私の友人に薩憂哈札布といふ蒙古人がある。彼は滿鉄に於て十二才から教育され、今滿洲の官吏として重寶がられてゐる。日本人と何等変らぬ人生觀を持つてゐる。日本語修養の賜である。しかも劔道三段と聞いて私は感心した。

豊葦原瑞穂國に育つた稻は粒が小さく粘着力があつて太く肥えてゐる。日本人の食糧の源泉で汲めども盡きせぬ瑞奇を有する。然し一粒の米は我等の栄養とはならぬ。之に熱を興へてしかも集合した一椀の飯となつて始めて栄養價値を増大する。天照大神はこのめぐみ深き窟を授け給ふた。この純正潔白な米に依つて生命を保持し活動の源泉を得る。米は如何なる食糧より優れ、又瑞穂國の米が最も優れてゐる。一粒の米の有する粘着力は日本人の一人を具現する。総体としての米粒は國民の集團を象徴してゐる。櫻の花は花辨を賞する花ではない。樹として而して樹の集合、花の集團を賞するのと全様に、蒸氣で蒸せられた米の集團が吾人の栄養を保証する。之を白に入れて打てば白い潔い更に栄養價の高い餅となり、もはや一粒の米の存在は認められない。一粒の粘着力の集合があるのみ。中華民國その他東洋諸國にはやはり米を産す。特に印度や支那は産額が多い。然し粒が長細く粘着力がない。米

養儀が低い。我等が神前に供へる餅は作れない。そこで民國では特に北支では稲の品種改良の目的で、日本の稲の種子を植えてみた。第一年は我が國の内地の米と同じものが得られた。然し第二年目以下は次第に旧來の米に還元してしまつた。深く之を考へて見るに、單に土質の關係や氣候風土の關係からではない。日本米の粘着力を継承する者は日本人の手に依つて行はれねばならぬ。日本の農民ならば必ず第二年目以後に粘着力ある粘の小さい米を作るに至ると確信する。天才的な農業國民として秀れた素質がある。不毛の地を肥沃の地にするは日本人の最近の実験が之を證する。此の日本人の傳統を漢民族に染移らせ之を同化してこそ支那大陸に日本米は栽培し得る。その時彼等はおもはや大和民族としての素質を有する時である。その時日本語を語る民族は一徳ではない。教徳を以て算する時代を何世紀かの後の世に建設せんが爲に我等の使命を行ひつゝある。これを規律するもの愛の最高道徳である。

御氣に召すま、

昔佛蘭西に非常に仲のよい二人の少女が住んでゐた。二人は従姉妹であり、どちらも大層美しかった。二人のうち、丈の高い、体格の持主はロザリンドと呼ばれ、他の少女の名はシリヤであつた。

ロザリンドの父は立派な公爵であつたが、彼の弟即

ちシリヤの父は兄の全領土を奪ひ、其の公園から兄を追ひ出した。

悪者の弟を憎み、ロザリンドの父を慕つてゐた多くの有力な貴族は兄公爵に從つて去り、ずつと離れたアーデンの森の緑林の木の下に彼等自身の宮庭をつくつた。

ロザリンドの父が城から追はれた時に、彼女の叔父は自分の幼い娘シリヤの友達としてロザリンドは手許に置いた。二人は共に成長した、然してシリヤはロザリンドに対して非常に優さしく親切にしたので、ロザリンドは時には、父が追はれた悲しみや、叔父の惨酷なことに対して叔父を恐る事も忘れた。

追放された公爵の腹心の友の一人にサー、ローランド、ド、ボイスと稱へられた勇敢な騎士が居た。彼は七くなつてゐて三人の息子が残つてゐた。長男のオリバーは良い兄ではなかつた。此の兄は、父の望んだ事は何もせず、又オーランドーといふ末弟をいたはったりは少しもせず、彼は弟に金も與へなければ、勉学の機会も與へなかつた、そして食事は召使共と一諸にさせてゐた。彼はオーランドーを嫉み、オーランドーが勇敢で強く人面が高いので彼を憎んでゐた。そしてオーランドーよりも自分の馬の方をずつと大切にした。

サー、ローランド、ド、ボイスにはアダムと称ぶ老

僕が居た。彼はサー・ローランドーに大層忠実に仕へた。そして末弟に対するオリバーの惨酷さを見て大変悲しんだ。

或日、オーランドーは、自分は最早兄の冷遇に耐へる事が出来なくなつた事を感じて、父が自分に残した財産を呉れて、自分の立場を固る為に出してほしいと兄に頼んだ。彼は、自分は此の怠惰な生活をして、何も為さず、何も學ばないやうな生活を続けて行く事は、どうにも我慢が出来ないと言った。

然しオリバーは弟を朝弄するのみであつた。そこで兄弟は喧嘩をした。アダムが亡き父の為にならぬ事を仲直りさせやうとした時、オリバーは此の老僕を恐れ、出て行けと言った。

「出て行け、ぼけ犬め。」彼は言った。

「ぼけ犬とおっしゃいますか、實際、長の御奉公で齒が脱けてしまひましたわい。大旦那様なら私めにそんな惨酷な事はおっしゃりませぬまいに。」とアダムは言った。

オリバーは此の喧嘩があつてから益々オーランドーを憎んだ。彼は弟を殺し父がオーランドーの為に残した財産を自分に残すに最もよい手段を計画した。

此の頃馬公爵即ちシリヤの父は、大角力競技會を開いた。

彼には自分の強いお抱へカ士が居た。此のカ士は大層角力が上手だつたので、極く勇敢な者のみが彼と角力を取りたいと望んだが、彼は戦ふ相手は皆殺した。

オーランドーは立派な取手であつて、恐れる者は一人もなかつたので、此の競技會に出て、兄のカ士と戦はうと決心した。

オリバーはオーランドーが競技會に出て自分のカ士に向はうとするのを知つて、公爵のカ士に自ら相ひに宮廷に来る様に向ひをやつた。彼はオーランドーに関してカ士に纏ゆる種類の不埒な虚をついて、弟は昔蘭西中で最も悪い人間の一人である。それで若しカ士が弟の頸骨を折れば、それはカ士がよい事をした事になると話した。

カ士はオーランドーを殺す為に全力を盡すと約束し自分が彼と戦つて後に彼が一人立ちで歩くやうだつたら自分はもう決して角力は取らないと言った。

次の日、公爵の館の前の芝生で角力競技會が開かれた。公爵及び彼の重臣達が競技を見に出席し、シリヤとロザリンドも亦見物に来た。それはずっと昔は、身分の高い婦人でも、現在我々が非常に乱暴で惨酷だと思ふやうな事を見物するのが普通の習慣であつた。シリヤとロザリンドが角力場に来る一寸前に公爵のお抱カ士が凄惨な事をしてかした。

一人の老人が自分の三人の立派な息子がある有名な力士と勝負をするやうにとやつて来た。彼等は順々に角力を取った。そして次々に肋骨を挫かれて抛倒された。彼等は傷がひどいので、老父は、自分の息子はきつと存命は覚束ないと思ひ、如何にも悲しそうに歎いてみたので、それを聞いた者も泣かざるを得なかった。

この事があつて後、外の誰でも公爵の抱え力士のやうな強い男と勝負をしやうとするのは悪の滑頭だと皆が言った。そして唯一人の男が勝負をやつて見やうと申し出た。

此の男がオーランドー、ド、ボイヌであつた。

彼が前に出た時、彼はほっそりとし、若々しく勇ましく人高が高く見えたので、オーランドーが何者であるかを知らない偽公爵でさへ此の力士が押しつぶされて生命を失ふ事を考へて其の毒があつた。

「お前達から若者に立合を止めさせるやうに説得して見て御覧」公爵はシリヤとロザリンドに言った。「あの男に勝目は無いよ。わしの力士は必ずあの男をやつつけるだらう。」

シリヤとロザリンドは、オーランドーに勝負をする事を思ひ止まらせるやうにと親切にやさしく頼んだ。

「お前さんはあの男の大力で勝へやうれた実例を見たでせう。若しお前さんが其の目を見たなら、かのやう

な危険な立合はお止めになるでせう。私達がお願ひですから此の立合をよして下さい。お前さんの身の爲に、

「おえ、お止めなさいよ。お止めになつたからといって、誰もお前さんが臆病だとは誰も思ひませんよ。我達が此の相撲を中止するやうに公爵様にお願ひしますから。」とロザリンドは云つた。

然しオーランドーは「貴女方のお望みに背く私を悪くお思ひにならないで下さい。そんなに御親切なお美しい婦人に対して「否」と申す事は容易な事ではございません。どうか、貴女方のお美しい目で御覧を願ひやさしい御好意を胸に抱いて、私の試練に行く事をお許し下さい。殺されたところで、私には悲しんで哭れる者もございません。私が居なくなつた其の穴は、もつとよい人間で埋るでせうよ」と云つた。

「私は、微力だけれど、お前さんに上げたいわ。シリヤが言った。

「私のも、此の方の力の足しに。」ロザリンドが云つた。「人の目に見えないやうになりたいわ。そうすれば、あの男がお前さんと勝負をして居る時に脚を掴んで小股を掴つてやるのに。」小さなシリヤが言った。

斯くして相撲は始まつた。そして誰でも公爵の力士がオーランドーを殺すのを見やうと見つめて居た。

然し、オーランドーが力士に殺されなくて、彼は強

いカ士を腕で持ち上げ地上に抛げた。

人々は皆驚いて叫んだ。そして公爵は「もうよし、もうよし。」と叫んだ。

「殿様、どうぞもつと続けさせて下さいませ。未だ始めたばかりでございます。」オーランドーは云った。

公爵は自分のカ士に向つて、どうしたか尋ねた。然しカ士は身動きもせずちつと倒れてゐて、何も云ひ得なかつた。

「あれは口もきけません。殿様」と貴族の一人が云った。そこで公爵は彼を運び去らせた。

「若者、お前の名は何と云ふか。」公爵はオーランドーに尋ねた。

「オーランドーと申します。サー、ローランドー、ド、ボイスの三男です。」

「お前の父はおれの仇敵であつた。お前が他の父の名を言ったなら、お前の勇敢な働きも満足に思つたであらうが」公爵は言つた。

「私はサー、ローランド、ド、ボイスの息子である¹⁸³事を誇つて居ます。公爵の後嗣になれても此の位置を代へるものですか。」オーランドーは言つた。

そこで公爵、貴族連、従者等は去り、オーランドーのみロザリンドとシリヤと残された。

シリヤは彼女の父がオーランドーに苛酷な言葉を

へた事を我慢する事が出来なかつた。

「若し私が父であつたなら、あんな事はいはないでせう。ロザリンドさん」彼女はロザリンドに話した。

「私の父はサー、ローランド、を自分の愛のやうに愛して居りました。そして世間の人もサー、ローランドがどんなに氣高いかをよく知つて居りました。あの若い人がサー、ローランドの息子であると知つてゐたなら、私は涙を以つてあのやうな危険な事はしないやうに頼んだでせう。」と彼女はシリヤに話した。

「行きませうよ、さうしてオーランドーに話させう。私は父の不親切な言葉が恥かしくてたまりません。」やさしいシリヤは言つた。

そこで、彼女とロザリンドはオーランドーの側に行き彼の勇氣を讃えた。そして、ロザリンドは彼女の頸から金鎖をはづして彼に與へた。そして若し彼女が貪しい娘でなかつたなら、もつと良い物が上げたと言つた。

オーランドーは二人が善良なのでどちらも好きであつた。然し彼はロザリンドを非常に愛して居たので、若し彼女が承知すれば、何日かは彼女と結婚をしやうと決心をした。

¹⁸⁴其の間、偽公爵は敵の息子であるオーランドーが自分のカ士を負かした事を怒り又ロザリンドが彼女の金

鎮をオーランドーに與へた事をも怒った。

偽公爵は此等の事を考へれば考へる程益々腹が立つて来た。彼の侍臣の一人に親切な男が居て、公爵がオーランドーに害を加へやうとしてゐるから、早く逃げれば逃げる程彼の爲によいだらうと告げた。

公爵は自分で、ロザリンドに城を去るやうに乱暴に定めた。

「お前が此の十日間に若しこの城の附近二十哩のうちに発見されたら、命はないぞ」と彼は言った。

シリヤは自分に親しいロザリンドに対する父の残酷さを歎いて父にそんな不正をしないやうに頼んだが父は聞かなかつた。

其處で、若し彼がロザリンドを追ふなら彼女も亦追ひ出してしまはねばならぬ。それは彼女はロザリンドが居なければとても日を過せないからと言つた。

「此の馬鹿が！」と彼女の父は云つて、ロザリンドに向ひ、直ぐ此處を出て行かねば、殺してしまふと余計に怒つて言つた。

然しシリヤはロザリンドと別れたくなかつた。其處で二人は一諾にロザリンドの父と其の友とが隠れて居るアーデンの森に旅する事に決心した。

¹⁸⁵ 彼等は途中で盜賊に合ふだらうと言ふ事を知つてゐたので、シリヤは日に焼けたやうに見せる爲に顔を染

め、奪ふ價值がないやうに田舎の少女のやうな服装をした。ロザリンドは少年の着物を着、斧と槍を持った。

さて、公爵にはタッチエストーンと呼ぶ道外師が居た。此の道外師は面白い人向で、何時もくだらない話や戯談を言つてゐたが、此の若い女主人のシリヤを大変可愛がつて居た。

「タッチエストーンを連れて居つたらどう？ あの道外師は私共の慰安にならなくなつて？」 仕度が出来て出発するばかりになつた時ロザリンドが云つた。

「あれは私に従いてなら世界中何處へだつて行くでせうよ。あれを未させる事は私に言はして下さいね。シリヤが言つた。

そこで、ロザリンドとシリヤが森に向つて出かけた時親切なタッチエストーンは道を案内した。

彼は赤い着物を着、帽子の鈴をチヤラチヤラ鳴らし風船の中の をがらがら鳴らし、食物や着物の荷物を背負つて愉快さうに先に立つた。夜が来て森が暗くなり、ロザリンドとシリヤが疲れて悲しくなつた時、タッチエストンの樂しさうな顔や戯談で二人の疲れた少女を再び元気づけた。

此等の事が起つてゐた時にオーランドーの兄は、オーランドーを殺す方法を計画して居た。彼は妬み深かつたので、世人が、オーランドーがカ士を勇敢に打負

かした事を讃めそやすのを聞いて益々彼を憎んだ。彼はオーランドーの部屋に火を放って焼き殺すか、又若しオーランドーが逃げたら他の何等かの手段で暗殺しやうと決心した。

老僕アダムは此の悪計画を洩れ聞いてオーランドーに忠告した。オーランドーはアーデンの森の行く事に決心した、然してアダムも共に行きたいと言った。其處で彼等もアーデンの森を目指して出掛けた。

遠く離れた青葉の森にロザリンドの父と其の友とは共に樂しく暮して居た。彼等は鹿を射取り、御馳走を沢山食べ、深い緑の木陰で休む折には愉快な歌を唱つて居た。

次のものは彼等の歌った歌の一つである。

緑なす木の下に

我と共に臥し

美しき鳥の音に調べを合せ

面白く歌ふ人よ

こゝへ来れ、こゝへ来れ、こゝへ来れ

こゝには敵はなし

冬のあらしの外は

或日彼等が一諾に食事をして居た時一人の若者が手に拔身の刀を持って木の間から飛び出して来た。

「待て、食ふ事はならんぞ！」彼は叫んだ。

公爵と彼の友達は何が望みなのかと聞いた。

「食物、空腹で餓死しそうです。」

彼等は若者に席に就いて食べるやうに言ったが彼は純情から自分に従つて来た一人の老人が森の中で空腹の爲に死にかけてゐる、自分は最初に彼に食べさせる迄は何も食べないと言つて席に就かうとしなかつた。

此の若者はオーランドーであつた。此の善良な公爵と其の従者がオーランドーを助けてアダムを元の場所に連れて来て、世話をし二人に食物を與へたので、老人と其の主人は再び元の如く元氣になつた。

公爵がオーランドーは自分の友のサー・ローランド・ボイスの息子であつたと知つた時、彼はオーランドーを歓迎し、其の忠実な老僕を暖かくいたわつた。

其處でオーランドーは幸福に森の奥深く公爵やその仲間と住んだ、然し常にロザリンドの事を考へ続けてゐた。彼は毎日彼女に関する詩を書いて森の木にそれをピンで止めるか木の皮に深く刻みつけた。彼は彼女以外の人々の事は考へる事は出来なかつた。彼は彼女を¹⁸⁸非常に愛して居た。

さて、ロザリンド、シリヤ、タツケエストン等も無事に森に着いた。そして其處の羊飼ひの持つてゐた小さな小舎を借りた。

ロザリンドもオーランドーが彼女を愛して居るに溺

らず彼を愛してゐた。そしてオーランドーが木に残して置いた詩を読んだ時彼が彼女を忘れて居ないのを知って彼女の心は喜んだ。

遂に或日彼女とシリヤはオーランドーに出会った。然し彼等の着て居た着物や日焼した色に染めた類では彼等が誰であるか知る事が出来なかつた。そして彼等を羊飼ひの少年と其の妹だと思つた。それは二人がそんなふりをして居たのであつた。

彼は二人と非常に親しくなつた、そして二人の小さな小舎にしばしば訪れて二人に彼の愛する美しい婦人ロザリンドの事を常に話して居た。

其の間オーランドーの兄は悪い事をしたのを罰せられた。オーランドーが逃げ出した時、シリヤの父即ち偽公爵はオリバーがオーランドーを殺したと考へた。彼はオリバーの領土を取り上げて、オーランドーを連れて来なければ 宮廷に来る事はならぬと命じた。

其處で、オリバーは弟を探しに、一人でさまよひ出した。そして幾週も幾週も探したが無駄であつた。遂に彼の衣はボロボロになり、頭髪は長くもちやもちやになつて居たので、まるで乞食の様であつた。或日オーランドーはロザリンドの小舎から帰る途中无極の木の下で寝込んで居るオリバーに¹⁸⁹ 偶然出会つた。彼の頸筋には大きな蛇がぐるぐる巻きついて居て、ちやうど彼

を咬みついて殺さうととしゐるところだつた。然し蛇はオーランドーを見てづるづると逃げ出した。然し丁度蛇が逃げ去つた時に、オーランドーは彼の不親切な兄の近くに他の恐ろしい危険がせまつてゐるのを見た。一匹の餓えたライオンが眠つて居る男を今にも殺さんと木の陰にうづくまつて居た。

暫しの間 オーランドーは兄が惨酷であつた事のみ考へてゐた。然し ライオンが兄に飛びかゝつて片々に引裂いても、それだけの事をされる價値は十分にあると思ふた。二度迄も彼は兄を残して去らうと行きかけたが彼はやさしい男だと思つて敬に対しても惨酷な事をする事は出来なかつた。

彼はライオンと戦ひ猛しい鋭い齒で腕を傷けられた後切り伏せた。

格闘の騒ぎがオリバーを起した、そしてオーランドーが自分の命を賭してオリバーを救つてゐるのを見た。オーランドーに対して爲した悪い事や、自分に対するオーランドーの好意をひどく恥しくて、自分が今どんなに悔いてゐるかを告げて許しを乞ひ、二人は中直りをした。

オーランドーは兄を公爵の所に連れて行き、食物を携へ、着物を着かへさせ、自分の傍については何も云はなかつた。

然し、其の間中も、傷から血が出てゐた。そして突然に彼は地上に倒れ、血が出過ぎたので気絶した。

¹⁹⁰ロザリンドがオーランドーの負傷した事を聞いて、血の附着したハンカチーフを見た時、彼女も又気絶した。彼女が気絶したのを見、彼女を少年だと思つてゐた人々は男らしくないのを嘲笑した。

然し尙も無くロザリンドは彼女の秘密を皆に打あけた。「此の身をお手許に献げます。私はあなたの物でございますから」と父である公爵に云ひ次にオーランドーに向つて「私をあなたに献げます。私はあなたのものですから」と言つた。

それで、公爵はロザリンドが自分の娘であつた事を知り、オーランドーは羊飼ひの少年が彼自身の美しいロザリンドであつた事を知つた、然して佛蘭西中に公爵とオーランドー、ド・ボイス等の如く幸福な者は他になかつた。

ロザリンドとオーランドーは、緑葉の木蔭を教会とし、小鳥の聲を唱歌隊として、直ちに結婚した、然して同じ日に、自分の爲した悪事を心から後悔したオリバーはシリヤと結婚した。

彼等が結婚しやうとしてゐた時、公爵の所へ使が来て、公爵の弟の偽公爵が前悔を悔いたと告げた。彼は公國を捨てたので、善い公爵は自分の領土を再び手に

入れた。

かくして、彼等は緑の木蔭の下に居た時の如く幸福に暮した。

(下巻終り)

昭和十二年六月十五日印刷
昭和十二年六月二十日發行



發行者

東京市城東區龜戸町二四六

郎

印刷所

東京市神田區駿河台三七

社

發行所

東京市神田區駿河台三七

會

(電話神田三〇三三番)

廣文

白星

特 217
637

3
2

終